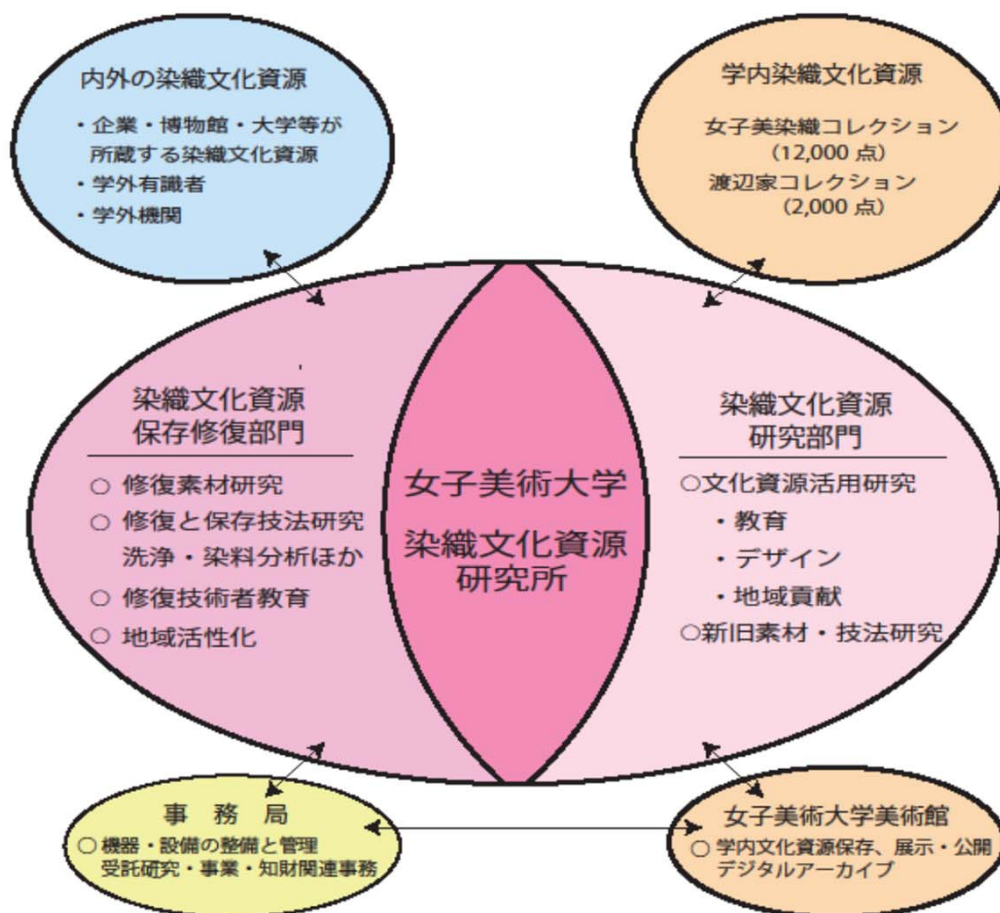


平成28年度私立大学研究ブランディング事業計画書

1. 概要（1ページ以内）

学校法人番号	131031	学校法人名	女子美術大学		
大学名	女子美術大学				
事業名	染織文化資源研究拠点の形成				
申請タイプ	タイプA	支援期間	3年	収容定員	2440人
参画組織	芸術学部デザイン・工芸学科、美術学科、アート・デザイン表現学科				
審査希望分野	人文・社会系	○	理工・情報系		生物・医歯系
事業概要	<p>本学芸術学部工芸学科刺繍領域の歴史と伝統の中で培われてきた染織文化財の修復技術とその知見の蓄積を礎石とし、ファインアート領域における素材研究、色彩学等他領域における研究等を学内横断的に結びつけ、「染織文化資源研究」の推進を本学独自の使命とする。津波被災文化財に実施している国内初の洗浄技術と理論の提示、地域文化資源の修復等を通じ地域貢献の一翼を担うとともに、今後の教育へのフィードバック、素材研究、人材育成を実行する。</p>				

イメージ図



2. 事業内容（2ページ以内）

（1）事業目的

本学は日本唯一の刺繍の専門領域を持ち、伝統的な日本刺繍の技術伝承にとどまらず、染めや織を含む工芸研究によって、新たな美術刺繍の創造と染織文化財修復の両分野において、教育と研究、社会貢献の基盤を作り評価を得てきた。この実績を活かし、特長を強化して、染織文化資源について他の研究分野と融合した総合的な研究を行う「女子美術大学染織文化資源研究所」を発足する。研究所には次の2部門を置き、染織文化資源に関わる研究拠点化を実現する。

【染織文化資源保存修復部門】

長年実施してきた染織文化資源の保存修復研究を、学内の他領域と連携し、本学の特徴的な研究として確立する。

①保存修復技術の確立

本学の修復では、巡行時に土埃などが付着する祭礼の山車飾幕の基布を洗浄する実績がある。欧米では、酸化を促進する付着物を除く保存修復手法として、タペストリーの洗浄が長く行われてきたが、日本では、約10年前の国立西洋美術館所蔵のタペストリー洗浄が初の事例である。洗浄は大型シンクや仮設洗浄槽を設置できるスペースが必要であり、本学以外での実施例は稀である。この実績から、東日本大震災の大津波により被災した陸前高田市立博物館所蔵の染織文化資源レスキューにおいて「文化財の残らない復興は本当の復興ではない」をスローガンに、塩化物イオン濃度を下げる取組（洗浄）と安定化処理および本格修理が本学へ依頼された。実践的研究で得た知見を国内で展示や学会発表し、他の被災資料を担当する機関と連携、共にその手法を構築してきた。今後は、技術精度を上げて染織文化資源の安定化処理手法を確立し、他の研究機関と共有するという先駆的役割を果たす。

②天然染料の非破壊分析技術確立と体系化

本学ではこれまでに取組んだ博物館や美術館、地域の染織文化資源の保存修復において、天然染料の分析調査を行ってきた。本学で実績のある色彩学研究的観点から、非破壊調査によって染料の分析方法を研究し体系化することによって、染織文化財の保存・展示・文化史的研究に資する。

③技術を伴った研究者養成

染織文化資源の保存修復の分野では、実践を伴わない人材育成が多く行われてきた。本学が所蔵する染織文化資源を教材に若手研究者を受入れ、OJTによる研究者の養成を行う。

【染織文化資源研究部門】

本学は明治期より110余年にわたり、画壇、デザイン、教育界等のあらゆる分野に優れた人材を送り出してきた。本事業では、これまで染織においては“染料”、ファインアート系においては“絵の具”のように分野別になされてきた研究を、染織文化資源研究を主軸として関連付け、総合的な研究拠点として分野横断的な独自の研究体制を構築し、共同研究を促進する。

①安全な代替顔料や染料の開発

安全な鉱物資源のナノ化技術を利用し、毒性や資源の枯渇等の理由により使用が将来的に不可能となる代替顔料や代替染料を開発する。

②失われた染織文化資源関連技術の解明並びに染織材料の非破壊による解明

測色機材やマイクロスコプの精度向上により従来測定できなかった細分化された情報まで、非破壊による測定が可能となった。旧来の経験や目視で得た情報による研究に科学的分析を加え、より客観性をもつ総合的な研究体制を構築、現代では失われた染織技法および素材の解明を行う。

③絶滅に瀕する道具や素材の維持開発と供給

工芸関係を中心とした後継者不足等により絶滅の危機に瀕する道具の維持と安定供給を計る。また、染織関連の素材のなかで失われてしまった優れた素材の復活を研究する。

（2）期待される研究成果

染織文化資源の研究拠点化により、総合的な研究が可能となることで次の成果が期待される。

【染織文化資源保存修復部門】**①保存修復技術の確立**

これまでに構築された修理技術の更なる向上により、より安全な手法が確立できる。また、研究を長期にわたって継続させることにより、現在の手法では完全には除去できない塩化物イオンによる影響を経過観察できる。こうした染織資源保存修復における技術の蓄積を理論化し、国内外の研究機関と共有することで、相互の技術向上に貢献し、我が国の染織文化資源の安定化技術の精度を向上させることができる。

②天然染料の非破壊分析技術確立と体系化

これまで多くの先行研究においては資料の断片を用いて染料分析を行っていた。非破壊による染料特定は染織文化資源の安全な研究方法であり、この手法で広く内外の研究機関と連携研究できれば、得られる資料データの幅・量ともに広がる。分光測色手法を用いて天然染料の標準資料化（体系化）をはかることによって、制作年代の推定、染色技術の時代的特徴、展示照明の照度等の研究に寄与することができる。

③技術を伴った研究者養成

実践を通じた研究者養成によって、地域における染織文化資源の保存修復と染織文化の維持発展に関わる研究者が増加し、地方創生の一助となる。

【染織文化資源研究部門】

①安全な代替顔料や染料の開発

鉱物を資源とした顔料分子をナノ化することにより染料に転用していく研究は、環境汚染や健康被害のため使用できなくなっている多くの“化学染料色”を、安全なものとして作り出す可能性を導き出す。

②失われた染織文化資源関連技術の解明並びに染織材料の非破壊による解明

本学が所蔵する女子美染織コレクション1万2千点、渡辺家コレクション2千点の「本学染織文化資源」に関する染料と技術の基礎資料を作成することによって、現代では失われた、または失われつつある技法と材料についての解明が可能となり、国内外の「染織文化資源」との比較研究も可能となる。この研究は、今後の創作や特徴のある製品開発につながるものである。

③絶滅に瀕する道具や素材の維持開発と供給

道具や素材が失われることにより廃れてしまう地域に根ざした工芸文化とその技術の伝承に寄与することで地域文化の存続と発展に資する。

こうした研究の成果は、論文・報告書等により内外へ公表し、開かれた染織文化資源研究ネットワークの構築を目指す。この分野の研究者及び技術者の育成につなげることが可能となる。地域に根ざした染織文化資源にかかわる人材育成の観点からの地域振興にも資する。

(3) ブランディングの取組

“制作”という実践を伴った材料・技術の研究は、本学の研究の特色として位置づけることができる。建学の精神に「専門の技術家の養成」と掲げ、女性の美術教育において比類のない歴史、実績を持っている。これまで社会において指導的な役割を果たし得る高度な専門知識、技術をもつ人材の養成を行い、芸術分野を中心としあらゆる分野で数多くの専門家を輩出してきた。本事業に取り組むことにより、各分野を横断的に取り組む研究課題を持ち、美術における各分野でのエキスパート輩出のみでなく、社会に還元できる研究に取り組むという新たな視点を持つことが出来る。

【染織文化資源保存修復部門】

本学ではかねてから染織品についての経年の汚れによる酸化の促進が繊維に与える影響について着目し、祭礼の飾り幕や更紗の修理の際に洗浄についての研究を行ってきた。2011年の東日本大震災発災により海水損した染織文化財の塩化イオン濃度の低下(脱塩)の処理については、本格的な取り組みを開始した。その取り組みを保存修復学会、服飾文化学会のポスターセッションに於いて広く公開され、多くの関係者から助言や指導をいただきながら改善をすすめてきた。大学院の染織品保存修復演習の授業においても本学所蔵染織品コレクションのインド更紗「クリシュナ物語」、タペストリー「ジョナサン行状記」等の洗浄を行い、実践的な研究を積むことの難しい染織文化財の洗浄を行っている。染織品を含む繊維製品の洗浄については本学が国内の各研究機関への情報提供や研修を通じて、広くその技術を提供する事が出来る。

また、本学学生は本学所蔵の染織コレクションを用いた実践的な染織文化資源の研究を行い、経験を積むことが難しいこの分野でも専門家を目指すことが可能となる。本学における染織文化資源研究所は、染織分野を中心とした工芸文化の維持発展・技術継承を可能とする最後の砦と言える大学となる。

染織品の保存修復と色彩学の見地からの分析は、これまで本学の各専攻領域でそれぞれが培ってきた技術を統合させて行うもので、本学及び本学美術館所蔵の染織資源をその資料として有効に使用することが出来る。またその結果を学会や学会誌で発表することにより、天然染料を用いた資料分析を安全性の高い非破壊という手法で行う事の一般化を本学がリードする。

【染織文化資源研究部門】

伝統的な制作方法の消滅に伴い、周辺材料、道具等も減少または消滅の危機に瀕している。それら材料、道具の消滅を手をこまねいて見過ごすのではなく、それらを「守るもの」、先端技術を用いて「再生するもの」として研究を行なう。この分野においては、企業と協力し本学内だけでなく広く一般に広報し、解明された技術については生産地の産業の一助として活用される。

また、技術の復活に伴い、素材を多分野で活用する手法を見出すことは、生産量の減っている特定分野の材料の活用増加にもつながり、生産地域の活性化を視野に入れることができる。

絶滅危惧と定義した道具、特に日本刺繍の針については現在国内に残る数件の工場に調査を行い、口伝で受け継がれてきた制作方法を美術専攻立体アート専攻により制作方法を解明し女子美ブランドで制作を行い供給していく。これは、実際にそれらを必要としている側と制作が出来る側が学内にいることにより可能になる研究と考える。

また、本学染織コレクションの意匠は、クールジャパンのデザイン宝庫として、未来への文化資源となり得る価値を有している。染織文化資源研究所の組織を有機的に運用し、学生・卒業生の起業につなげるバックアップ体制を構築し、大学ブランドとして活用する。

3. 事業実施体制（1ページ以内）

本学刺繍領域は、手芸科の教員養成とともに時代の先端であった「美術刺繍」を掲げ、美術大学としての創作刺繍教育を現在に繋げた歴史をもつ。この教育研究の展開として、技術・理論の両面から信頼を受けて染織文化資源の修復に携わり、文化資源を次代へ伝える成果は高い評価を得ている。対外的には、修復は刺繍一分野の研究とみなされがちであるが、学内外の横断的な研究による情報や技術提供によって、確認しつつ行われてきた経緯を持つ。本事業は、染織文化資源の修復技術と研究を礎石とした染織文化資源研究を本学のブランドと定義し、その価値観について学長を中心に学内で再認識する機会となる。学内で共有した価値観は、専攻領域の壁により、また教員の専門分野ですら壁となり分断されがちな、学内の教育研究体制の再構築を加速する起爆剤とする。

【学内の実施体制及び点検評価体制】

染織文化資源研究所の研究活動はデザイン・工芸学科のみならず、美術学科、アート・デザイン表現学科すべての専攻領域の枠組みに捉われない本学で初めての革新的な研究体制となる。また、その評価体制は学長、副学長、研究所長を含める学内の運営委員会を設置し、毎年直接、点検評価検証を行う体制とし、学長の強力なリーダーシップのもと、急速に変化を続ける社会の要請に迅速に応えながら、染織文化資源研究を通じ、社会に対し美術大学としてあらたな提案も可能とする体制を整える。

従来の美術館部門との連携のみならず、事務部門も外部との連絡窓口、経費執行管理、契約事務、施設設備等をはじめとして、広報部門等、従来直接研究に関することのなかった部門の支援も受ける体制とする。

【外部評価と連携】

本学の歴史と伝統に根ざした染織文化資源研究であり、過去の研究や数多くの産学連携や地域連携の取り組み経験を通じた学外との豊富な人脈との強固な繋がりを染織文化資源研究所の客観的な外部評価に積極的に活かす体制とする。外部評価を研究所活動を客観化する手段として活用するのみならず研究成果については外部公開を行うこととし、染織文化の理解とさらなる維持発展に寄与することとする。

現状では津波被災文化財の保存修復に係わる技術的な評価を2012年より東京国立博物館より受けているが、今後はより広範な外部評価を受け入れる。具体的には保存修復技術の研究、非破壊調査による染織材料の同定・体系化、取組みを通しての技術者教育、新旧の素材や技法の研究等や今後の研究を通じて得られる新たな知見について外部博物館や研究機関の研究者、民間企業や所属する技術者等から研究成果報告や研究会においての意見や講評をうける。その中で指摘された問題について即座に再検討を行い、その後の研究活動の効果的改善に役立てることにより、外部評価と改善が循環する研究体制を作り上げる。

4. 年次計画（2ページ以内）

平成28年度	
目標	<p>【染織文化資源保存修復部門】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・染織文化資源の安定化処理の精度向上 ・染織文化資源における非破壊による染料分析方法の構築 <p>【染織文化資源研究部門】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学収蔵作品を活用しての染織文化資源教育の標準化 ・本学が所蔵する染織文化資源の伝統技法の解明
実施計画	<p>【染織文化資源保存修復部門】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・洗浄環境整備のための大型シンク、浄水システム等の設置 ・大学院授業における染織文化資源洗浄法の蓄積とその共有化 <p>【染織文化資源研究部門】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・染織品の伝統技法の解明研究のための機器・設備の導入 ・本学所蔵の染織文化資源の伝統技法調査・模造作品制作（1年目）
平成29年度	
目標	<p>【染織文化資源保存修復部門】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・火気を完全分離した染織文化財修復室整備の完了 ・染織文化資源における非破壊による染料分析方法の構築 ・染織文化資源安定化処理後の経過観察方法の確立 ・染織文化資源保存教育の地域（東日本大震災津波被災地域）への浸透 <p>【染織文化資源研究部門】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本学および他機関が所蔵する染織文化資源の伝統技法の解明 ・新たな染料として期待される鉱物資料の研究、鉱物顔料のナノ化
実施計画	<p>【染織文化資源保存修復部門】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新染色室整備を完了し、修復作業室・洗浄室・染色室の各室内で完結する環境での研究開始 ・本学および他機関所蔵染織文化資源の2D分光放射計の導入による測定 ・安定化処理後の保存環境整備、資料の経過観察により残留塩化イオン濃度の基準値を検証 ・津波被災の軽度な資料について、現地処理のための教育普及の実施 <p>【染織文化資源研究部門】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本学及び他機関所蔵の染織文化資源の伝統技法解明のための調査、模造作品制作（2年目） ・有毒物質を含む化学染料の代替となる色料を選定（1年目）、実験実施
平成30年度	
目標	<p>【染織文化資源保存研究部門】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・染織文化資源における非破壊による染料分析方法の構築、まとめ ・染織文化資源の洗浄、安定化処理後の経過観察方法の確立と成果発表 ・継続的な修復技術者の育成・登用 <p>【染織文化資源研究部門】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・染織文化資源の伝統技法及び素材の解明、成果発表 ・鉱物顔料のナノ化と代替色料による染織作品制作、成果発表 ・染織文化資源に関する素材と道具の研究（針、修理裂）
実施計画	<p>【染織文化資源保存研究部門】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・染織文化資源の測色計による測定結果から標準資料を作成。他の分析方法との比較検討、成果発表を行う ・染織文化資源の洗浄に経験の深い海外の研究機関の視察を行い、洗浄および安定化処理後の経過観察方法について意見交換、検討を行い、学会、論文等で公表する ・染織文化資源の保存修復技術者の教育体制確立を目的に、大学院染織品保存修復演習を修めた若手技術者のインターン雇用を開始する <p>【染織文化資源研究部門】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在では行われていない染色技法・素材について解明した成果と試作品を発表 ・有毒物質を含む化学染料の代替となる色料を選定（2年目）し、染織作品制作、成果発表 ・27年度より開始している絶滅を危惧される道具「刺繍針」の研究と製作を開始する ・外部の研究機関・産地と連携して、修復・制作に用いることのできる日本の染織素材を検討